

和合治久教授の「治・未病」という考え方

モーツァルトは音楽療法の特効薬か

「音楽療法」という言葉を耳にしたことのある方は、読者の皆様の中にも多いと思う。

しかし具体的に、いかなる症状に対して、どのような手段で治療にあたったらいいのか、その方法や曲目の選定までをご存知の方は少ないのではなからうか。「それは迷信の一つではないのか」とか、「科学的根拠がいつたいあるのか」と、お考えになる方もあろうかと



和合治久（わごう・はるひさ）氏
1950年、長野県松本市生まれ。父は元松本市長。和合正治、東京農工大学大学院修士課程修了後、京都大学にて理学博士取得。埼玉医科大学助産師、埼玉医科大学保健医療学部教授、2006年より埼玉医科大学保健医療学部教授、学科長を務める一方（現在は学科長は退任）、首都大学東京で非常勤講師を、中国、東北師範大学と長春中医药大学で専任教授を務める。これまでに、東京農工大学、京都大学、放送大学女子大学、名古屋大学大学院、弘前大学、放送大学学院、早稲田大学などで非常勤講師として教鞭をとる。長年にわたる協働会および臨床検査技術師教育への大きな貢献が評価されて、「永年勤続賞」を受賞。

思われる。

今年10月の終わり、私は「We Love 信州の会」事務局局長で司法書士の山岸史氏にお招きを受けた。紹介の労をとって下さったのはニッポン・シンフォニーの音楽監督・指揮者の新田孝氏である。そしてその席に音楽療法の国際的権威・埼玉医科大学保健医療学部教授・健康医療科学科の初代学科長・和合治久理学博士が同席して

おられた。

「モーツァルトの音楽が、人間の脳と心の健康に効くのです」。和合教授が温顔で語り出した。

「モーツァルト音楽療法ですか」。私は問い返した。顔付きは多分、半信半疑という表情だったと思う。この種の話はいままで何回か耳にしていたし、酒蔵などで名曲を流すと、日本酒の品質に好結果が生じ、味、香り、こくなどが向上するという噂もある。

私は下戸なので確認・保証する能力も資格もないが、仕込みの時期に人気ヴァイオリニストの天満敦子が訪れて、生演奏を行うという銘酒「天満」なる日本酒も存在するらしい。

それも「根拠あり」だと、和合教授は仰るのである。「生物を構成する細胞には、約85%以上の水

が存在し、生命活動の代謝を行っている。音は空気の振動として伝播し、この振動が細胞にぶつかる、細胞内の水分に波及して波動水が生ずる。この波動水が細胞内の代謝あるいは遺伝子の発現にプラスの波及効果をもたらすということは充分にありうる」と、和合教授は語る。

震動する空気の質、つまり音とか音楽の周波数、いかんによつては「細胞の寿命が延びたり、その細胞が産出する物質が増加したりするのではない。だから、もろみを酵母菌で発酵させてお酒を造るときに良質の音楽を聴かせると、波動水のもたらす代謝効果によつて酵母菌が活性化したり、死亡率が減少したりすることはありうるのではないか——そうであれば、香りの良さに関係するアミノ酸が

増加するという現象にも説明がつく。

いままで「迷信だ」とか「気のせいだ」とか言われていた事柄が、和合教授のお話によつて、にわかには真実味を帯びはじめた。

「音楽療法」という言葉は使っておられるが、和合教授の意図、され、本命は「未病克服」ということらしい。

「未病」という聞き慣れない言葉は、中国医学の根本的な思想である。教授の著書を読むと具体的な説明があるが、後漢時代（西暦25〜220）に成立した中国医学には「聖人不治已病 治未病」（聖人はすでに病になった人を治すのではなく、未病のうちに治す）という言葉があるという。

「未病」とは、完全に健康というわけでもなく、かといって病気でもないという、いわば病気の前兆を抱えた、不健康な体調のことらしい。教授は「だるさ、倦怠感、肩こり、手足のしびれ、めまい、イライラ、不安な気分、鬱、不眠など、不快感を伴う、何となく体調のすぐれない状態」と説明されているが、医学用語でいえば「不定愁訴」である。「私は経験しているよ」とか「実は、いつもそう

なんだ」と頷いて下さる読者がいらっしゃるかもしれない。

「未病」という状態の多くは自律神経のバランスの乱れから生ずる。

自律神経とは、人間の意識とは関係なく相反する働きをもつ「交感神経」と「副交感神経」のことをいう。この両神経は、人体の内臓や器官などの活動を自動的に調整し、体内の環境を一定の環境に保つのであるが、外部環境の変化などによつて両者のバランスが崩れると、体調は不全になり、病気にかけやすくなる。つまり「未病状態」になるらしい。

昂進すると鬱病になったり、帯状疱疹、悪くすれば癌の発生要因にもなったりしかねない。そこまですつたらもはや「未病」ではない。「発病」である。

現代社会はストレスが多い。国際問題、国内の政治・経済、そして職場——定年で日々の仕事から解放されても、孤独感に苛まれたりして、人間なかなか「日々好日、悠々自適」という心境には至らない。要するに周囲に刺激が多すぎるのである。

「そんな状態を改善し、不安や焦燥といった状態から精神を解放

してくれるのに、モーツァルトの音楽が役立つのです」と和合教授は言う。単に「聴きやすい」とか「馴染みやすい」というだけではない。

「彼の作品には、3500〜4500 Hzの高周波音と透明感あふれる純粋なゆらぎがバランスよく、豊富に含まれている。和音も豊かで、倍音成分が出やすい」というのが、和合教授の分析結果なのだそう。曲を周波数帯で区切ったグラフを見せていただくと、確かにその部分が突出して多くモーツァルトの曲中に含まれているのがわかる。ゆらぎとは、小川のせせらぎとか、爽やかな風音とか、人の心を安ませる自然の音のことをいう。

1957年、フランスのアルフレッド・A・トマティス博士は、音の周波数と人間の脳脊髄の位置との間には、直接深い関連があるとの学説を発表した。頭頂（大脳）には8000 Hz以上、延髄には4000〜6000 Hz、頸椎には2000〜3000 Hz、胸椎には750〜2000 Hz等々。適量ならば活動、度が過ぎればいろいろな原因になる交感神経の作用にブレーキをかけるのが副交感神経

で、そのなかでも特に内臓を休める迷走神経の出口は延髄にあるので、「ここに響くような周波数が人体に好影響を与えるのではないか」と和合教授は説く。

なお教授のお話によると、人間の耳介（音は耳殻と言った、外耳の貝殻状の部分）は、不思議なことに延髄を刺戟する3500〜4000 Hzの周波数を効果的に集音するのに便利な構造になっているのだそうである。

和合教授の「治未病音楽療法」ではモーツァルトの音楽を聴いて、体調に反応させる最善の方法は生演奏を聴くこと。CDなどを使用するなら良質のヘッドフォンを用い、30分間くらい眼を閉じ、集中して聴くことが必要だという。

床に就く前に、習慣として試みてご覧になったらいかがだろうか。☑

Takeshi Nakano
1931年、長野県松本市生まれ。東京大学理学部卒業。日本開発銀行（現・日本政策投資銀行）を経て、ケンワッド代表取締役、レココーポレーションの常任顧問などを務める。レココーポレーションの制作で「ウイニー」などを多数受賞。著書に「文化芸術振興作品賞」「小澤征爾 天才の秘密」「小澤征爾 師の法則」「ウィニーの対話」（いずれも文春新書）、「指揮者の役割」（新潮新書）などがある。